



# 血管くん、ありがとう

〔神奈川県〕

窪田 健太郎

29歳

自分ががんになるとは、思っても  
みなかった。

20歳の誕生日を迎えた翌月、私は  
左大腿骨の骨肉腫と診断された。気  
持ちの整理がつかぬまま入院し、抗  
がん剤治療が始まった。

つらく厳しいものであったが、家  
族の励ましもあり、膝を人工関節に  
する手術、歩行のリハビリ、残りの  
抗がん剤治療を乗り切った。

無事に退院し、回復も順調。そろ  
そろ就活を始めようと考えていた矢  
先だった。舌に違和感を覚え、口腔  
外科を受診すると、舌がんと告知さ  
れた。手術を急ぐ必要がある、場合  
によっては言語障害が残るという。

心がポキリと折れた。私は周囲に  
当たり散らした。何をどうすればい

いのか、分からなかった。

そんな心境で入院した初日。担当  
の女性看護師さんが採血に来た。止  
血帯で私の腕を縛ったが、なかなか  
血管は浮き上がらない。長く続いた  
抗がん剤治療の影響だった。すると、  
その看護師さんは私の腕をなでなが  
ら、こう言った。

「血管くん、ありがとうね。君は  
彼のために一生懸命がんばって、ち  
よつと疲れちゃったんだね。でも、  
彼ももう一度がんばるから、力を貸  
してね」

込み上げてくるものを抑えられな  
かった。

何て優しく、温かいのだろう。陰  
鬱な感情が洗い流されていった。そ  
して、自分に欠けているものが分か

った気がした。

その日から、私は明るく、楽しく  
いようと努めた。うまくいかないと  
きもあつたが、入院生活を前向きに  
送る力になった。

結局、障害も残ることなく、手術  
は無事に終わった。私は今、模索し  
ながら、新たな道を歩み出している。  
悩んだり、落ち込んだりしたときは、  
あの看護師さんの言葉を思い出して、  
腕の血管を見ることにしている。あ  
の優しさと温かさは、これからもず  
つと、私の人生を支えてくれるだろ  
う。